学術論文

# 地域協働教育に対する学生の意識の動向
## ～高知大学地域協働学部第２期生・第１期生調査の比較～

湊　　邦生　　玉里　恵美子
辻田　　宏

キーワード：地域系・地域志向・地域協働・意識調査

## はじめに

高知大学地域協働学部（以下「本学部」）は2016年度に開設２年目を迎え、無事第２期生を受け入れることができた。この間、本学部をめぐる環境は大きく変化しており、かつ第１期生と第２期生の間でも、後述するように属性等さまざまな違いが見られる。したがって、第２期生の地域協働教育に関する意識についても、第１期生とは少なからず異なることが予想される。そのような相異も含め、第２期生の意識を第１期生と可能な限り比較可能な形で把握する必要があった。

このような背景から、本学部では前年に引き続き、第２期生となる2016年度入学者を対象として、学部教育に関する調査を実施した。その結果を本稿にて報告する。

本稿の構成は以下の通りである。第１節では、学部開設時点からの地域協働教育をめぐる動向および課題について概観する。以後の節は第２期生調査の結果を主に報告する。第２節では調査概要を概観し、第３節では集計結果を第１期生調査と比較しながら紹介していく。第４節では各設問項目と第２期生の属性（性別、入試方式、県内出身か県外出身か）との関連を分析し、結果について、こちらも第１期生調査の結果と対比しながらみていく。以上の結果について、第５節で考察を加えた上で、最後に本稿のまとめを行う。

## １．地域協働教育をめぐる動き

本学部が開設された2015年４月からの全国の大学における動向として特筆されるのが、いわゆる「地域系」学部・学科等の増加である。表１には2016年度に新設もしくは改組によって誕生したこの種の学部・学科・プログラムを管見の限りでまとめている。河合塾（2016b）は、「地域」またはそれに類する名称を持つ学科は全国に76あるとしている。それらのうちの13学科が2016年度に開設されたわけで、この１年での増加ぶりが見てとれよう[1]。

「地域系」学部・学科の増加を受け、それらに着目した調査・研究も少しずつではあるが現れている。河合塾（2016b）では、先述の76学科を対象としてアンケート調査を実施、回収された48件の回答結果をまとめている[2]。調査は2016年２～４月に実施されており、調査項目は育成する人材像と卒業後の進路（進路の想定）に関するもの、学士課程教育の特徴に関するもの、地域での実習に関するものの３つに大きく分かれてい

[1] 河合塾（2016b）『地域系学科における学びに関するアンケート ― 調査結果報告書 －』。
[2] 48件のうち、３件は学部としての回答、45件が学科としての回答であった（河合塾、2016b）。

表１　2016年度に新設・改組された「地域」もしくは類似する名称を有する学部・学科・プログラム

１．学部の開設

| 区分 | 大学名 | 学部 | 学科 | 都道府県 |
|---|---|---|---|---|
| 国立 | 宇都宮 | 地域デザイン科学 | コミュニティデザイン | 栃木 |
| | | | 建築都市デザイン | |
| | | | 社会基盤デザイン | |
| 国立 | 福井 | 国際地域 | 国際地域 | 福井 |
| 国立 | 愛媛 | 社会共創 | 産業マネジメント | 愛媛 |
| | | | 産業イノベーション | |
| | | | 環境デザイン | |
| | | | 地域資源マネジメント | |
| 国立 | 佐賀 | 芸術地域デザイン | 芸術地域デザイン | 佐賀 |
| 国立 | 宮崎 | 地域資源創成 | 地域資源創成 | 宮崎 |
| 公立 | 長崎県立 | 地域創造 | 公共政策 | 長崎 |
| | | | 実践経済 | |
| 私立 | 大正 | 地域創生 | 地域創生 | 東京 |

２．学科の開設

| 区分 | 大学名 | 学部 | 学科 | 都道府県 |
|---|---|---|---|---|
| 国立 | 岩手 | 人文社会科学 | 地域政策課程 | 岩手 |

３．プログラムの開設

| 区分 | 大学名 | 名称 | 位置づけ | 都道府県 |
|---|---|---|---|---|
| 国立 | 静岡 | 地域創造学環 | 学部横断プログラム | 静岡 |
| 国立 | 京都工芸繊維 | 地域創生 Tech Program | 学部共通プログラム | 京都 |

資料：河合塾(2016a)『2016年度新増設大学・短大一覧』(2016年12月19日閲覧、URL: http://www.keinet.ne.jp/dnj/16/shinzo/16shinzo.pdf)、静岡大学地域創造学環ウェブサイト（2016年12月26日閲覧、URL: http://www.srd.shizuoka.ac.jp/)、京都工芸繊維大学ウェブサイト(2016年12月26日閲覧、URL: https://www.kit.ac.jp/edu_index/tech-program/)

る。回答では、育成する人材像としては地域の問題を解決できる人材を上げる回答が多くの学科で挙げられており、主な進路としては想定も含め、公務・金融業・サービス業が多く挙がった。学士課程教育については、分野として社会学や商学・経済学を重視する傾向が見られる。また学科・コースで地域実習を必修としているとの回答が34件あった一方で、必修単位数が１単位から26単位までと異なっている。その実習授業の狙いとしては、１，２年次では地域理解や地域課題の発見、３，４年次では地域課題の解決案の立案や立案した解決案の実践を挙げる回答が目立っている。

また、河合塾（2016b）では参考資料として高校教員を対象とするアンケート調査結果も掲載している。その中では、地域系学部・学科について「あまり知らない」「よく知らない」という回答が全体の半数を上回ること、分かりにくい点として「教育内容」がこちらも全体の半数を超えており、次いで「研究内容」「他の学部との違い」「卒業後の進路」が主に挙げられていることが示されている[3]。「地域系」学部・学科には、情報発信の強化が求められていると言えよう。

また、岩崎（2016）では地方国立大学の地域系学部について研究が行われている[4]。この研究では、まず背景として国立大学改革と地域重視の意義や状況を整理した上で、事例研究の結果から、これらの学部において地域を教育研究のフィールドとした実践的な活動が主流になること、地域系学部が高い受験倍率と定員充足率を記録する一方、地元学生が集中するとは限らないと述べている。

[3] 調査概要は河合塾（2016c)「注目の学部・学科　第34回 地域系」『ガイドライン』2016年７・８月号に掲載されている。これによると、高校教員対象の調査は2016年４～５月に同社モニターの進路情報誌によるモニターを対象に実施し、95件の回答を回収している。

[4] 岩崎保道（2016)「国立大学における地域学系学部の動向－国立大学改革を背景として－」『関西大学高等教育研究』7：135-141。

表２　調査対象者の基本属性

| | ２期生(N=60) | | １期生(N=67) | | | ２期生 | | １期生 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | N | % | N | % | | N | % | N | % |
| 性別 | | | | | 出身地 | | | | |
| 男子 | 30 | 50.0% | 22 | 32.8% | 関東 | 2 | 3.3% | 2 | 3.0% |
| 女子 | 30 | 50.0% | 45 | 67.2% | 東海 | 3 | 5.0% | 6 | 9.0% |
| | | | | | 近畿 | 8 | 13.3% | 2 | 3.0% |
| 入試方法 | | | | | 中国 | 10 | 16.7% | 12 | 17.9% |
| AO | 16 | 26.7% | 16 | 23.9% | 四国（除高知） | 7 | 11.7% | 22 | 32.8% |
| 推薦 | 10 | 16.7% | 11 | 16.4% | 高知 | 25 | 41.7% | 17 | 25.4% |
| 一般 | 34 | 56.7% | 40 | 59.7% | 九州 | 5 | 8.3% | 6 | 9.0% |

注：Ｎは回答数を示す（以後の図表でも同じ）。また「出身地」は１期生・２期生とも、卒業した高校を基準としている。

さらに、教育と職業の関連性についての研究も行われている。奥田・神谷（2015）は地域系学部の卒業生に対する聞き取り調査を行い、その結果から、卒業生の多くが大学教育と職業との関連性が希薄であると感じていること、「学士力」「社会人基礎力」といった汎用的能力に大学教育の職業的意義を見出していること、正課活動・課外活動の中で、特にゼミ活動に積極的に参加することが大学教育の職業的意義を高める必要条件となっている一方、教育がゼミ教員による属人的なものになりがちなことという３点を論じている[5]。執筆者自身が述べる通り、現時点では初期キャリアに対する大学教育の即時的効果しか計測することができないため、職業的意義については数年後あらためて調査する必要があるが、地域系学部・学科において教育に携わる者にとっては留意すべき内容であろう。

以上、2015年からの地域系学部・学科の増加とそれらに関する調査研究の登場という２点を見てきた。いずれも基本的に歓迎すべき内容と思われるが、他方、湊・玉里・辻田・中澤（2016）が指摘した、教育を「身につける側」の思いが見えづらいという課題は残っている。この間、学部増加によって現役学生が増加した一方で、そのような学生に焦点を当てた調査研究は、管見の限り現れていないためである。この点からも、本学部学生の教育に対する意識を調査、把握し、その結果について議論を深める必要が存在するのである。

次節からは、そのような取り組みとして、第２期生に対する調査および結果について報告する。

## ２．第２期生調査の概要[6]

本調査は地域協働学部新入生を対象に、新入生オリエンテーションの機会に実施しているものである。調査項目については第３節以降で紹介するが、原則として共通のものを用いて年度間比較の可能性を担保しつつ、内容がそぐわなくなったものについては本稿筆者による合議の上、調査実施前に選択肢の一部入れ替えを行っている[7]。

第２期生60名を対象とする調査は、2016年４月２日に実施した新入生オリエンテーションにおいて実施した。今回も第２期生全員が調査に回答しており、無回答およびエラーがきわめて少数しか発生していないことから、60名全員分の調査票を有効と判断した。

[5] 奥田遼介、神谷浩生（2015）「地域系学部における教育の職業的意義の検討－地域系学部卒業生へのヒアリング調査を通して－」『地理学報告』117：15-29。

[6] 第１期生に対する調査の概要については湊・玉里・辻田・中澤（2016）「地域協働教育への学生の意識～高知大学地域協働学部第１期生調査の結果から」『高知大学教育研究論集』第20巻 pp.25-33を参照。

[7] 例えば、第1期生調査ではＱ２の選択肢に「地域協働学部紹介冊子（ブランドブック・リーフレット）等」というものがあったが、第２期生調査では「地域協働学部紹介パンフレット」とした。これは第1期生入学前にはパンフレットとブランドブックの双方を公開していたのが、学部開設後はパンフレットに一本化したためである。ただし、どちらも冊子体による学部紹介であること、また煩雑さを避けることから、後に掲載する表４では両者を「地域協働学部紹介パンフレット／冊子」としてまとめて表示している。

表３　地域協働学部を志望した理由（Ｑ１、３つまで回答可）

| | ２期生 | | | １期生 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | % | | | % | |
| | N | 有効回答 | 回答者 | N | 有効回答 | 回答者 |
| 学びたい内容を学べる | 44 | 27.2% | 73.3% | 45 | 22.8% | 67.2% |
| カリキュラム・教育制度が充実している | 29 | 17.9% | 48.3% | 38 | 19.3% | 56.7% |
| 充実した学生生活が送れる | 27 | 16.7% | 45.0% | 34 | 17.3% | 50.7% |
| 入試方法・科目が合っている | 21 | 13.0% | 35.0% | 29 | 14.7% | 43.3% |
| 就職に役立ちそう | 15 | 9.3% | 25.0% | 20 | 10.2% | 29.9% |
| 立地・環境が良い | 6 | 3.7% | 10.0% | 7 | 3.6% | 10.4% |
| 教員・スタッフが魅力的 | 5 | 3.1% | 8.3% | 13 | 6.6% | 19.4% |
| 偏差値が合っている | 5 | 3.1% | 8.3% | 4 | 2.0% | 6.0% |
| クラブ・サークル活動が盛ん | 4 | 2.5% | 6.7% | 0 | 0.0% | 0.0% |
| 就職・進路指導等のサポート体制が整っている | 3 | 1.9% | 5.0% | 2 | 1.0% | 3.0% |
| 社会調査士の資格が取れる | 1 | 0.6% | 1.7% | 1 | 0.5% | 1.5% |
| 留学制度や研修制度が充実している | 1 | 0.6% | 1.7% | 1 | 0.5% | 1.5% |
| その他 | 1 | 0.6% | 1.7% | 2 | 1.0% | 3.0% |
| 施設・設備が充実している | 0 | 0.0% | 0.0% | 1 | 0.5% | 1.5% |
| 学費減免・奨学金制度がある | 0 | 0.0% | 0.0% | 0 | 0.0% | 0.0% |
| 合計 | 162 | 100.0% | | 197 | 100.0% | |

注：%のうち「有効回答」は全有効回答に対する比率、「回答者」は全回答者に対する比率をそれぞれ示す（以後の表でも同じ）。

## ３．集計結果および学年間比較

### 3.1．基本属性

ここからは第２期生の調査結果について紹介するとともに、第１期生との差異を検討していく。まず、表１に第２期生の基本属性と、第１期生との比較結果を示す。第２期生の特徴として、第１期生と比較して男子学生が増加した結果、男女比率が等しくなっている点が挙げられる。加えて、高知県内出身者の比率が大幅に上昇した点も特徴と言えよう。この背景には、前節で述べた地域系学部の増加によって、受験生が分散したこと、あるいは地域協働学部開設１年を経て、学部の存在が県内に浸透したことが考えられる。

### 3.2．地域協働学部を志望した背景（Ｑ１～Ｑ３）

今回の調査でも前年同様、本学部を志望した背景として、志望理由（Ｑ１）、志望動機に影響を与えたもの（Ｑ２）、魅力を感じたキーワード（Ｑ３）の３つをたずねている。表３では、第２期生の回答と第１期生の回答それぞれの集計結果を示す。なお、両者の間で特に顕著な差があった項目を示すため、独立性の検定で有意確率が５％未満であり、かつ最小期待度数の問題がないものについては印をつけて示している[8]。

表３を見ると、回答の比率や、比率を基準とする順位には若干の変動が見られる。とはいえ、独立性の検定で有意差が出るような顕著な相異は見当たらない。また上位の回答を見ると、「学びたい内容を学べる」「カリキュラム・教育制度が充実している」「充実した学生生活が送れる」「入試方法・科目が合っている」「就職に役立ちそう」までは順位の入れ替わりはない。第１期生同様、第２期生も教育内容への期待や、入学試験で優位に立てるとの見込みから志望した学生が多い。

続いて、表４では対象者の志望動機に影響を与えたものについて、集計結果を比較している。なお、項目が異なるため厳密な比較は不可能であるが、おおまかな

[8] なお、独立性の検定ではピアソンの適合度統計量 $x^2$（２×２のクロス表についてはイェーツの補正後の数値）を用いる。また最小期待度数については、前年調査の分析と同じくによる（１）最小期待度数が１未満のセルがない、かつ（２）期待度数が５未満のセルが全体の20%以下という条件を設定し、これを満たす分析結果のみを採用する（太郎丸(2005)『人文・社会科学のためのカテゴリカル･データ分析』ナカニシヤ出版）。この基準は属性との関連についても適用する。

表４　志望動機に影響を与えたもの（Ｑ２、複数回答可）

| | ２期生 | | | １期生 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | % | | | % | |
| | N | 有効回答 | 回答者 | N | 有効回答 | 回答者 |
| 地域協働学部紹介パンフレット／冊子 | 33 | 16.8% | 55.0% | 36 | 16.1% | 53.7% |
| 高校教員 * | 27 | 13.8% | 45.0% | 43 | 19.3% | 64.2% |
| ホームページ | 26 | 13.3% | 43.3% | 40 | 17.9% | 59.7% |
| オープンキャンパス | 16 | 8.2% | 26.7% | 9 | 4.0% | 13.4% |
| 入試要項 | 15 | 7.7% | 25.0% | 12 | 5.4% | 17.9% |
| 家族 | 15 | 7.7% | 25.0% | 16 | 7.2% | 23.9% |
| 高知大学案内 | 11 | 5.6% | 18.3% | 9 | 4.0% | 13.4% |
| 新聞などの記事 | 10 | 5.1% | 16.7% | 9 | 4.0% | 13.4% |
| オープンフィールドワーク | 9 | 4.6% | 15.0% | 14 | 6.3% | 20.9% |
| TV 番組「ともに、未来へ」 | 7 | 3.6% | 11.7% | – | – | – |
| SNS 情報 | 5 | 2.6% | 8.3% | 0 | 0.0% | 0.0% |
| 大学情報サイト | 4 | 2.0% | 6.7% | 4 | 1.8% | 6.0% |
| 友人 | 4 | 2.0% | 6.7% | 0 | 0.0% | 0.0% |
| 雑誌など特集記事 | 2 | 1.0% | 3.3% | 3 | 1.3% | 4.5% |
| その他 | 12 | 6.1% | 20.0% | 3 | 1.3% | 4.5% |
| 合計 | 196 | 100.0% | | 198 | 100.0% | |

注：* p <.05, ** p <.01, *** p <.001。なお「地域協働学部紹介パンフレット／冊子」は、第1期生調査では「地域協働学部紹介冊子（ブランドブック・リーフレット）等」、第２期生では「地域協働学部紹介パンフレット」という項目である（注６を参照）。

傾向を比較することまでは問題ないものと判断する。

表４のうち「高校教員」のみ、第２期生の回答の比率が第１期生のものより有意に低い。第１期生では最も選択が多かった回答であるが、第２期生に関しては他の選択肢に回答が分散していることになる。とはいえ、選択率は10％を上回っており、他の選択肢と比較すると志望決定への役割を果たす例がまだ多いと言い得る。他方、「パンフレット」を見ると、比率こそ有意差が出なかったものの、第２期生では「高校教員」に代わって最も選択されている。さらに「ホームページ」を合わせた３項目が、第１期生・第２期生とも10％を上回る有効回答を集めており、受験生獲得にはウェブ・紙媒体での情報発信と高校教員への働きかけが引き続き重要となることが分かる。

他方、比率に有意差はないものの、第１期生では回答がゼロであった「SNS 情報」を選択する第２期生が現れた点は特筆される。SNS での情報発信は、学部のみならずクラス単位、あるいは教員や学生個人が公式・非公式を問わず行っており、これらの効果が今後どうなるかが注目される。なお、今回12件と増加した「その他」の回答としては、高大連携の取り組みや出前授業に関する回答が４件、先輩の存在を挙げる回答が２件見られた。先の「高校教員」も含め、いわば「顔の見える」発信の重要性が示唆される。

次に、表５では対象者が魅力的に感じた地域協働学部に関するキーワード（Ｑ３）の集計結果を示している。

第１期生から第２期生の間では、「地域の人・モノ・企業をつなぐコーディネーター」のみが有意に減少しており、その他の項目で有意な変化をみせているものはない。「地域の人・モノ・企業をつなぐコーディネーター」は本学部で育成を目指す４つの人材像のうちの１つ「産業の地域協働リーダー」を示すものである。これが減少しているということは、将来民間企業等において地域協働を組織していくことに対し、第２期生は第１期生ほどの関心を示していないことが示唆される。とはいえ、残る３つの人材像を示す「地域をつなぐ行政リーダー」「６次産業化人」、「地域の暮らしと文化を支えるリーダー」についてみても、有意な変化は

表５　地域協働学部で魅力的なキーワード（Ｑ３、複数回答可）

| | ２期生 | | | １期生 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | % | | | % | |
| | N | 有効回答 | 回答者 | N | 有効回答 | 回答者 |
| 地域活性化 | 42 | 12.1% | 70.0% | 46 | 10.1% | 68.7% |
| 地域協働 | 40 | 11.5% | 66.7% | 43 | 9.5% | 64.2% |
| 企画立案力 | 29 | 8.3% | 48.3% | 32 | 7.0% | 47.8% |
| 地域振興 | 25 | 7.2% | 41.7% | 31 | 6.8% | 46.3% |
| 6次産業化人 | 24 | 6.9% | 40.0% | 28 | 6.2% | 41.8% |
| グループワーク | 23 | 6.6% | 38.3% | 34 | 7.5% | 50.7% |
| 協働実践力 | 22 | 6.3% | 36.7% | 26 | 5.7% | 38.8% |
| コミュニティ振興 | 20 | 5.7% | 33.3% | 25 | 5.5% | 37.3% |
| 地域の暮らしと文化を支えるリーダー | 18 | 5.2% | 30.0% | 25 | 5.5% | 37.3% |
| 地域協働マネジメント力 | 17 | 4.9% | 28.3% | 30 | 6.6% | 44.8% |
| 地域をつなぐ行政リーダー | 17 | 4.9% | 28.3% | 30 | 6.6% | 44.8% |
| 地域理解力 | 16 | 4.6% | 26.7% | 22 | 4.8% | 32.8% |
| 地域の人・モノ・企業をつなぐコーディネーター ** | 16 | 4.6% | 26.7% | 34 | 7.5% | 50.7% |
| 起業 | 14 | 4.0% | 23.3% | 16 | 3.5% | 23.9% |
| 産業振興 | 12 | 3.4% | 20.0% | 13 | 2.9% | 19.4% |
| 地域協働型産業人材 | 9 | 2.6% | 15.0% | 12 | 2.6% | 17.9% |
| サービスラーニング | 4 | 1.1% | 6.7% | 6 | 1.3% | 9.0% |
| 学習成果報告会 | 0 | 0.0% | 0.0% | 1 | 0.2% | 1.5% |
| 学年研究論文 | 0 | 0.0% | 0.0% | 0 | 0.0% | 0.0% |
| 合計 | 348 | 100.0% | | 454 | 100.0% | |

注：* p <.05, ** p <.01, *** p <.001

見られない。「地域の人・モノ・企業をつなぐコーディネーター」の代わりに人気を集める人材像を見出すことはできない。加えて、Ｑ３の回答数の合計も、第１期生から第２期生の間で100件以上減少している。人材像も含め、学部の特性についてのアピールを再強化する必要があるのかも知れない。

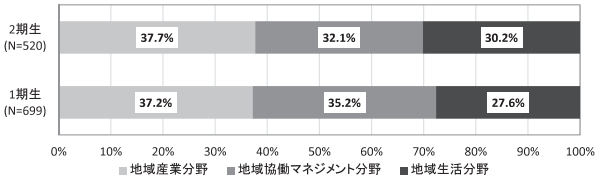
### 3.3. 受講を希望する授業分野（Ｑ４）

ここでは本学部が開講する専門科目のうち、対象者が受講を希望するものはどれかをたずねた結果を示す。選択肢は前年のものに新科目「地域生活と女性」が加わった40項目となっており、その全ての集計結果を挙げるのは煩雑となる。ここでは前年同様、専門科目の３つの分野、すなわち地域協働マネジメント分野、地域産業分野、地域生活分野[9] それぞれの比率についてまとめた。結果は図１の通りである。

前年と比較して地域生活分野の比率が2.6%上昇しているが、これは地域生活と女性の選択率2.7%がこの分野に加わったためであり、分野全体として人気が上がったとは言えない。他方、地域産業分野の比率は微増、地域協働マネジメント分野の比率は３%強減少しているが、全体として有意性を示すほどの変化ではなく、第２期生の選択傾向が第１期生と比較して変わったとは言い難い。

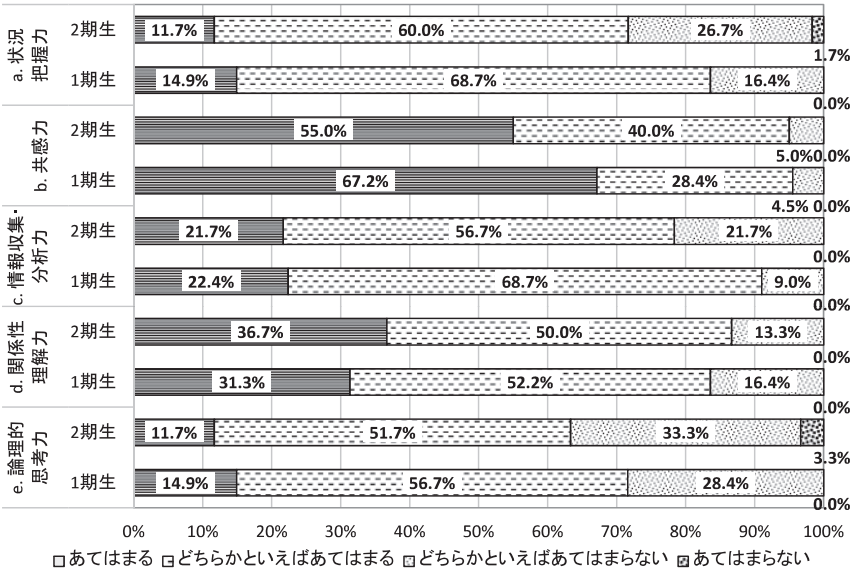
さらに、それぞれの分野で受講を希望する第２期生が最も多い授業科目を３つずつ見ていく。地域産業分

図１　受講を希望する授業分野（Ｑ４、複数回答可）




[9] 本稿で述べた以外の授業がどの分野に含まれるかについては、湊・玉里・辻田・中澤(2016)を参照。

図２　地域理解力関連項目への回答（Ｑ５）




注：第２期生はすべて N=60、第１期生はすべて N=67。

野では「地域デザイン論」が授業科目全体でも最多となる32件（回答全体の6.2%、全回答者に対して53.3%）の回答を集めた。この授業を選ぶ回答者が最も多かったのは第１期生調査に続いてのことである。次いで受講希望者が多かった２科目も第１期生調査と同じく「六次産業化論」と「経済学入門」であり、前者は24件（回答全体の4.6%、全回答者に対して40.0%）、後者は21件（回答全体の4.0%、全回答者に対して35.0%）の回答を得ている。これら以外の科目には順位・比率とも変動が見られるが、第２期生と第１期生の間で比率に有意な差があるものはない。

地域協働マネジメント分野では大幅な変動が見られた。今回最も回答件数が多かったのは「地域計画論」の26件（回答全体の5.0%、全回答者に対して43.3%）であり、第1期生調査で回答が最多であった「地域資源管理論」の回答件数は、それに次ぐ19件（回答全体の3.7%、全回答者に対して31.7%）となった。なお、「経営組織論」が同じく19件の回答を得ている。

地域生活分野では「コミュニティ振興論」が20件（回答全体の3.8%、全回答者に対して33.3%）、「地域スポーツ振興論」が19件（回答全体の3.7%、全回答者に対して31.7%）、「地域防災論」が17件（回答全体の3.3%、全回答者に対して28.3%）、それぞれ回答を得ている。このうち「コミュニティ振興論」は第１期生でも最も多い回答を得ており、「地域防災論」も回答件数で言えば前年と同じく第３位[10]となった一方、「地域スポーツ振興論」が新たに第２位に入っている。

なお、専門科目のうち前回調査との間で有効回答の比率に有意な変動があったのは、地域協働マネジメント分野の「非営利組織マネジメント論」「組織学習論」、地域生活分野の「非営利組織論」であり、いずれも５％水準で有意に減少している[11]。この背景については情報がなく判断しがたいが、第２期生は第１期生と比較して、非営利部門への関心が薄い可能性は示唆される。

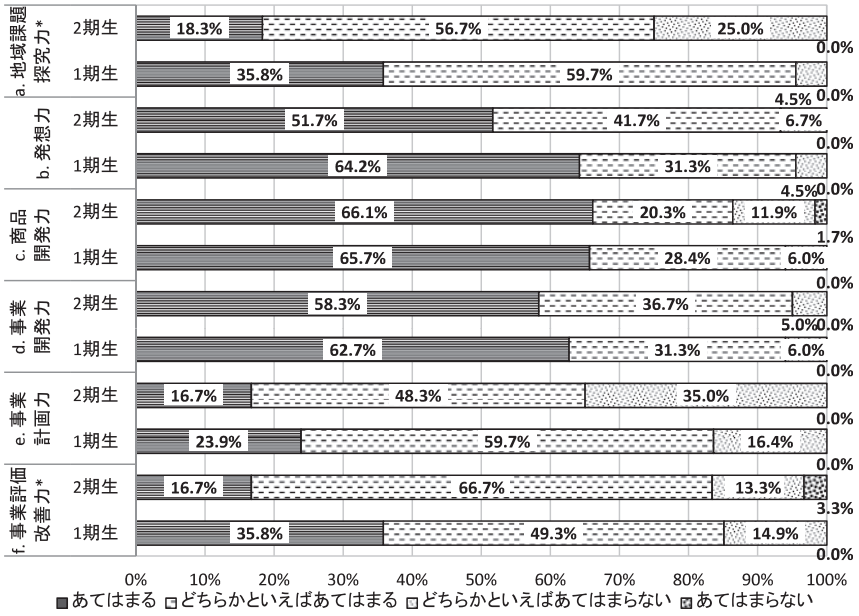
### 3.4. 地域協働マネジメント力の自己イメージ（Ｑ５～Ｑ７）

ここからは、本学部学生が獲得すべき「地域理解力」「企画立案力」「協働実践力」という能力に関する項目

[10] 第１期生調査では「地域防災論」と並んで「比較地域社会論」にも18件の回答があったが、第2期生では11件（回答全体の2.1%、全回答者に対して18.3%）に減少している。

[11] 「非営利組織マネジメント論」は第１期生の回答が有効回答中の3.3%であったのが、第２期生では1.9%に（件数は23件から10件、対全回答者比は34.3%から16.7%）、「組織学習論」の対有効回答比は3.0%から1.7%（件数は21件から９件、対全回答者比は31.3%から15.0%）、「非営利組織論」は2.4%から1.0%（件数は17件から５件、対全回答者比は25.4%から8.3%）にそれぞれ減少した。

図３　企画立案力関連項目への回答（Ｑ６）




注：* p <.05, ** p <.01, *** p <.001。第２期生はすべて N=60、第１期生はすべて N=67。

について、対象者の入学時点での自己評価をたずねた設問の集計結果を示す[12]。

まず、図２は地域理解力に関する項目群（Ｑ５）への回答結果である。第２期生でも第１期生でも、肯定的な回答（「あてまはる」「どちらかといえばあてはまる」）が５つの項目のうち「共感力」「関係性理解力」に関する項目で多く、「論理的思考力」で低くなっている点が共通している。一方、第２期生の回答では、第１期生調査ではなかった「あてはまらない」という回答が一部見られる。

次に「企画立案力」に関する項目群（Ｑ６）への回答結果を図３で示す。第２期生と第１期生との間では共通点と相違点双方が見られる。共通点としては肯定的な回答が「発想力」「事業開発力」の双方で多いことがあげられるが、「地域課題探求力」「事業評価改善力」では第２期生で否定的な回答が目立ち、第１期生との間の変動が５％水準で有意となっている。またＱ６でもＱ５と同じく、第１期生調査には見出せない「あてはまらない」という回答が第２期生で出現している。

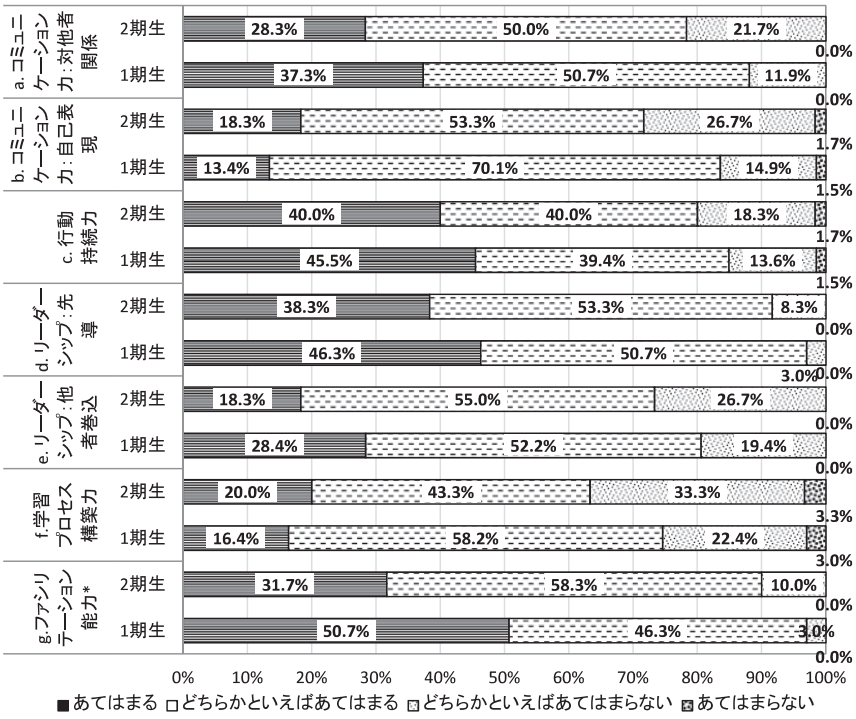
さらに、「協働実践力」に関連する項目群（Ｑ７）への回答結果を図４に掲載する。ここでは肯定的な回答が多いのが「リーダーシップ：先導」、少ないのが「学習プロセス構築力」という点で、第２期生・第１期生とも共通している。他方、「ファシリテーション能力」に関しては第２期生で「あてはまる」が減少、第１期生ではみられなかった「どちらかといえばあてはまらない」との回答が出現した結果、回答の変動が５％水準で有意となっている。その他の項目でも有意な変動でこそないものの、第２期生の肯定的な回答がすべての項目で第１期生よりも少ない点が注目される。

### 3.5. 学生が描く将来像（Ｑ８～９）

ここでは本学部の学生が入学時点で描く将来像について、仕事選びにおいて重視すること（Ｑ８）、将来就職を希望する職種（Ｑ９）に関する回答結果から検討する。前者は表６、後者は表７にそれぞれまとめてい

[12] これら３つの能力は、本学部が育成を目指す「地域協働マネジメント力」に必要となるものであり、上掲の順に第１学年、第２学年、第３学年でそれぞれ獲得すべきものである。これらの能力については上述のパンフレット及びウェブサイト「カリキュラム」（2016 年 1 月 7 日閲覧、URL: http://www.kochi-rc.jp/curriculum/）を、自己評価に対応する設問項目群とそれらを設定した理由については湊・玉里・辻田・中澤（2016）をそれぞれ参照。

図４　協働実践力関連項目への回答（Ｑ７）




注：* p <.05, ** p <.01, *** p <.001。第２期生はすべて N=60、第１期生は「行動持続力」のみ N=66、ほかは N=67。

表６　仕事を選ぶ際に重視すること（Ｑ８）

| | ２期生 | | | １期生 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | % | | | % | |
| | N | 有効回答 | 回答者 | N | 有効回答 | 回答者 |
| 収入 | 40 | 13.0% | 66.7% | 44 | 11.5% | 65.7% |
| 仕事内容 | 40 | 13.0% | 66.7% | 51 | 13.3% | 76.1% |
| 社会に対する貢献 | 31 | 10.1% | 51.7% | 31 | 8.1% | 46.3% |
| 職場の雰囲気 * | 29 | 9.4% | 48.3% | 46 | 12.0% | 68.7% |
| 自分の好きなことや趣味を生かせること | 29 | 9.4% | 48.3% | 33 | 8.6% | 49.3% |
| 事業や雇用の安定性 | 25 | 8.1% | 41.7% | 27 | 7.0% | 40.3% |
| 自分を生かすこと | 23 | 7.5% | 38.3% | 37 | 9.6% | 55.2% |
| 労働時間 | 22 | 7.1% | 36.7% | 18 | 4.7% | 26.9% |
| 将来性 | 19 | 6.2% | 31.7% | 30 | 7.8% | 44.8% |
| 仕事の社会的意義 | 15 | 4.9% | 25.0% | 18 | 4.7% | 26.9% |
| 通勤の便 | 12 | 3.9% | 20.0% | 11 | 2.9% | 16.4% |
| 能力を高める機会があること | 12 | 3.9% | 20.0% | 19 | 4.9% | 28.4% |
| 専門的な技能や知識を生かせること | 10 | 3.2% | 16.7% | 16 | 4.2% | 23.9% |
| その他 | 1 | 0.3% | 1.7% | 3 | 0.8% | 4.5% |
| 合計 | 308 | 100.0% | | 384 | 100.0% | |

注：* p <.05, ** p <.01, *** p <.001

る。なお、前者は多項選択、後者は単一選択の設問である。

表６を見ると、第２期生では「収入」「仕事内容」がそれぞれ最も多く選択されており、選択件数は40件（回

答全体の13.0%、全回答者に対して66.7%）となっている。第１期生では「仕事内容」のみが最も多かったのとは対照的である。対回答全体比で有意な変動を見せたのは「職場の雰囲気」であり、第１期生では12.0%の選択があったのが、第２期生では9.4%に減少した（件数は46件から29件、対全回答者比は68.7%から48.3%）。このほか、回答件数の多い順で見た場合、第２期生では「自分を生かすこと」が第７位となっており、第１期生（第４位）よりも下がっている。これらを合わせて考えると、第２期生は第１期生と比較すると、仕事についてより現実的に考えているのかも知れない。他方、「社会に対する貢献」を挙げる回答件数・比率が上位に上がる点では、第２期生・第１期生とも共通している。

また、表７に関しては第２期生・第１期生との間で有意な変化はみられない。どちらでも公務員を目指す学生が最も多く、次いで企業への就職、自身での起業が回答を集めている。

表７　将来就きたい職種（Ｑ９）

| | ２期生 | | １期生 | |
|---|---|---|---|---|
| | N | % | N | % |
| 公務員 | 29 | 52.7% | 35 | 55.6% |
| 企業 | 13 | 23.6% | 10 | 15.9% |
| 自分で起業する | 8 | 14.5% | 9 | 14.3% |
| 非営利団体、団体職員 | 1 | 1.8% | 5 | 7.9% |
| 家業のあとつぎ | 1 | 1.8% | 0 | 0.0% |
| その他 | 3 | 5.5% | 4 | 6.3% |
| 大学院進学 | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% |
| | 55 | 100.0% | 63 | 100.0% |

## ４．属性との関連（第２期生調査の分析結果と第１期生との比較）

今回も第１期生調査にならい、3.1で見た回答者の基本属性と、3.2から3.5で見た各設問項目の回答との関連について、単純クロス表分析を行った。なお、他の設問で行った第２期生・第１期生間の比較および、湊・玉里・辻田・中澤（2016）における第1期生の回答と属性との関連分析の双方と条件を揃えるべく、本稿でも属性との関連については、独立性の検定で有意確率が５％未満であり、かつ最小期待度数の問題がないもののみを報告する。

表８に分析の結果を示す。まず、大学案内を見て本学部を志望するようになった学生、「地域活性化」に魅力を感じた学生は女子の方が多い。このほか、授業科目の希望についても一部男女差が見られる。一方で、高校教員の勧めで本学部を志望するようになったのはＡＯ・推薦入試合格者で多く、ＡＯ入試合格者は将来の仕事について、その内容で選ぼうとする傾向が強い。一般入試合格者では「地域資源管理論」「六次産業化論」の受講希望者が相対的に多くなっている。ただし、県内生・県外生の違いに関しては、有意な関連を示す項目はなかった。

ここで気になるのが、表８で見られた関連が第１期生と共通するものなのかどうかである。そこで、表９では設問項目と属性との関連について、第２期生・第１期生それぞれの調査での結果を比較した結果をまとめた。ただし、一見して明らかな通り、第１期生・第２期生で共通して有意な関連は存在しない。少なくとも属性との関連からは、両者の学生群の間で共通性を見出すことはできない。

## ５．考察

前節まで、第２期生調査における各調査項目の集計結果および、属性との関連について、第１期生調査との比較も含め分析してきた。ここではその結果を基に、第２期生と第１期生との間での共通点および相違点として、筆者が気になった点をまとめておきたい。

まず、第２期生でも第１期生でも、学部紹介の冊子体や学部ホームページ、高校教員への働きかけといった、入学者の志望動機形成に比較的大きく寄与していることが示された。いわば「従来型」の学部独自の取り組みが、SNS や YouTube チャンネル[13]による広報よりも、はるかに効果を発揮している。もっとも、そのような取り組みの一部と言える「オープンキャンパ

[13] 本学部では2015年度に YouTube チャンネルを開設し（https: //www.youtube.com/channel/UC8YQy5XQ3G8pEy2WbhbEsIQ）、学部紹介動画を配信しているが、現時点で志望動機に影響を与えたとの回答は第２期生１件に止まる。

表８　属性との関連（第２期生・５％水準で有意差が認められたもののみ掲載）

| Ｑ２：高知大学案内 | | | | Ｑ３：地域活性化 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 選択 | 非選択 | 合計 | | 選択 | 非選択 | 合計 |
| 男子 | 1（ 0.3%） | 29（ 96.7%） | 30（100.0%） | 男子 | 17（ 56.7%） | 13（ 43.3%） | 30（100.0%） |
| 女子 | 10（ 33.3%） | 20（ 66.7%） | 30（100.0%） | 女子 | 25（ 83.3%） | 5（ 16.7%） | 30（100.0%） |
| 合計 | 11（ 18.3%） | 49（ 81.7%） | 60（100.0%） | 合計 | 18（ 30.0%） | 42（ 70.0%） | 60（100.0%） |
| $\chi^2$=7.124, p=.008, V=.388 | | | | $\chi^2$=3.889 , p=.049, V=.291 | | | |
| Ｑ４：農業振興論 | | | | Ｑ４：地域スポーツ社会学 | | | |
| | 選択 | 非選択 | 合計 | | 選択 | 非選択 | 合計 |
| 男子 | 5（ 16.7%） | 25（ 83.3%） | 30（100.0%） | 男子 | 12（ 40.0%） | 18（ 60.0%） | 30（100.0%） |
| 女子 | 13（ 43.3%） | 17（ 56.7%） | 30（100.0%） | 女子 | 3（ 10.0%） | 27（ 90.0%） | 30（100.0%） |
| 合計 | 18（ 30.0%） | 42（ 70.0%） | 60（100.0%） | 合計 | 15（ 25.0%） | 45（ 75.0%） | 60（100.0%） |
| $\chi^2$=3.889 , p=.049, V=.291 | | | | $\chi^2$=5.689 , p=.017, V=.346 | | | |
| Ｑ４：食品生化学 | | | | Ｑ４：地域生活と女性 | | | |
| | 選択 | 非選択 | 合計 | | 選択 | 非選択 | 合計 |
| 男子 | 1（ 3.3%） | 29（ 9.7%） | 30（100.0%） | 男子 | 1（ 3.3%） | 29（ 9.7%） | 30（100.0%） |
| 女子 | 9（ 30.0%） | 21（ 70.0%） | 30（100.0%） | 女子 | 13（ 43.3%） | 17（ 56.7%） | 30（100.0%） |
| 合計 | 10（ 16.7%） | 50（ 83.3%） | 60（100.0%） | 合計 | 14（ 23.3%） | 46（ 76.7%） | 60（100.0%） |
| $\chi^2$=5.880 , p=.015, V=.358 | | | | $\chi^2$=11.273 , p=.0007, V=.473 | | | |
| Ｑ２：高校教員 | | | | Ｑ４：地域資源管理論 | | | |
| | 選択 | 非選択 | 合計 | | 選択 | 非選択 | 合計 |
| AO | 11（ 68.8%） | 5（ 31.3%） | 16（100.0%） | AO | 5（ 31.3%） | 11（ 68.8%） | 16（100.0%） |
| 推薦 | 6（ 60.0%） | 4（ 40.0%） | 10（100.0%） | 推薦 | 0（ 0.0%） | 10（100.0%） | 10（100.0%） |
| 一般 | 10（ 29.4%） | 24（ 70.6%） | 34（100.0%） | 一般 | 14（ 41.2%） | 20（ 58.8%） | 34（100.0%） |
| 合計 | 27（ 45.0%） | 33（ 55.0%） | 60（100.0%） | 合計 | 19（ 31.7%） | 41（ 68.3%） | 60（100.0%） |
| $\chi^2$=7.894 , p=.019, V=.363 | | | | $\chi^2$=6.056 , p=.048, V=.318 | | | |
| Ｑ４：六次産業化論 | | | | Ｑ８：仕事内容 | | | |
| | 選択 | 非選択 | 合計 | | 選択 | 非選択 | 合計 |
| AO | 3（ 18.8%） | 13（ 81.3%） | 16（100.0%） | AO | 15（ 93.8%） | 1（ 6.3%） | 16（100.0%） |
| 推薦 | 2（ 20.0%） | 8（ 80.0%） | 10（100.0%） | 推薦 | 5（ 50.0%） | 5（ 50.0%） | 10（100.0%） |
| 一般 | 19（ 55.9%） | 15（ 44.1%） | 34（100.0%） | 一般 | 20（ 58.9%） | 14（ 41.2%） | 34（100.0%） |
| 合計 | 24（ 40.0%） | 36（ 60.0%） | 60（100.0%） | 合計 | 40（ 66.7%） | 20（ 33.3%） | 60（100.0%） |
| $\chi^2$=8.251 , p=.016, V=.371 | | | | $\chi^2$=7.742 , p=.024, V=.371 | | | |

表９　第２期生・第１期生による回答と属性との関連の比較（５％水準で有意差が認められたもののみ掲載）

| | ２期生 | | | １期生 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 性別 | 入試方法 | 県内・県外 | 性別 | 入試方法 | 県内・県外 |
| Ｑ１： 充実した学生生活が送れる | | | | | ○ | |
| Ｑ１： カリキュラム・教育制度が充実している | | | | | | ○ |
| Ｑ２： ホームページ | | | | | ○ | ○ |
| Ｑ２： 高知大学案内 | ○ | | | | | |
| Ｑ２： 高校教員 | | ○ | | | | |
| Ｑ３： 地域活性化 | ○ | | | | ○ | |
| Ｑ４： 非営利組織マネジメント論 | | | | | ○ | |
| Ｑ４： 地域デザイン論 | | | | | ○ | |
| Ｑ４： 地域資源管理論 | | ○ | | | | |
| Ｑ４： 六次産業化論 | | ○ | | ○ | | |
| Ｑ４： 農業振興論 | ○ | | | | | |
| Ｑ４： 地域スポーツ社会学 | ○ | | | | | |
| Ｑ４： 食品生化学 | ○ | | | | | |
| Ｑ４： 地域生活と女性 | ○ | | | | | |
| Ｑ５ｅ： 論理的思考力 | | | | ○ | | |
| Ｑ７ｅ： ファシリテーション能力 | | | | ○ | | |
| Ｑ８： 仕事内容 | | ○ | | | | |
| Ｑ８： 自分の好きなことや趣味を生かせること | | | | | ○ | |

ス」「オープンフィールドワーク」の選択率が高くない点は気になるが、地理的条件からこれらへの参加者が限定されることを考えれば、頷けない話ではない。

また、両学生群では、受講希望者が特に多い授業、学生の自己評価が高い項目も、第２期生・第１期生の間でほぼ同様であった。中でも、「論理的思考力」「学習プロセス構築力」における相対的な肯定的回答の低さには注意が必要であろう。このほか、希望する進路についても違いはみられなかった。地方の産業構造や、本学部に入学する学生の地域志向が大幅に変化しないとすれば、この傾向は今後も続くものと見込まれる。

反面、第２期生では魅力的なキーワードとして「地域の人・モノ・企業をつなぐコーディネーター」を選ぶ回答や、希望する授業として「非営利組織マネジメント論」「組織学習論」「非営利組織論」を選択する回答の比率が、第１期生よりも有意に低かった。各項目については前項で解説したが、ここではそれらに加えての全体的な背景として、第２期生の回答結果に総じてみられる「大人しさ」について述べておきたい。

ここまでの結果を振り返ってみると、第２期生は第１期生と比較して、多項選択設問全てにおいて回答選択数が少ない。また、自己評価を示すＱ５からＱ７では、「地域課題探求力」「事業評価改善力」「ファシリテーション能力」で第２期生の否定的な回答が有意に多かったほか、Ｑ５とＱ６では、第１期生で「あてはまらない」との回答がなかったのが、第２期生では一部の項目で現れている。

以上の結果を見る限り、少なくとも表面的には、第２期生は第１期生ほど本学部の学びに対して積極的な関心を有しておらず、自身に対しても肯定的な見方ができていないとの解釈があり得る。ただし、上記はあくまで調査結果の表面的な比較であり、結論として打ち出すのは早計である。上記のような「大人しさ」が、各設問項目について十分に吟味した結果であり、つまり消極性の表れではなく、思慮深さを示しているという解釈もまた可能だからである。

両者の解釈のうち、いずれがより真実に近いかを断定するのは非常に困難である。かつ双方の解釈が同時に成り立つこともあり得る。本稿では紙幅の関係もあり、両者の解釈の妥当性について深入りは避けるが、地域協働教育に携わる者としては、第２期生と第１期生との間で見られた上記の相違点を考慮した上で、特に第２期生の教育において、彼ら・彼女らに特にありうべき長所である「思慮深さ」をどう伸ばし、活用できるようにするかが課題となる点を特記しておきたい。

なお、第２期生と第１期生では、回答と属性との関連のあり方が異なっている点も見出せる。このような相違の背景については、判断材料に乏しいため現時点では解釈は控えたい。ただし少なくとも、地域協働学部の女子／男子学生、県内生／県外生、ＡＯ／推薦／一般入試合格者といった属性ごとの傾向を見出すことが、現時点では不可能な点のみを確認しておく。

## ６．まとめ

本稿では高知大学地域協働学部第２期生となる2016年度新入生を対象とした調査の結果について、第１期生調査との比較に基づき議論を行ってきた。その結果、第２期生に関しては、第１期生との共通点として入学者の志望動機形成に「従来型」の学部独自の取り組みがより大きく寄与している点、受講希望者が特に多い授業、学生の自己評価が高い項目、進路希望が見出された。他方、特に第２期生に関しては第１期生と比較して「大人しさ」が見られることも示された。同時に、性別、県内／県外の別、入試方式といった属性ごとで、学年を越えて共通する点が現時点では見出せないことも明らかとなった。入学年次ごとの違いはあっても、属性ごとの傾向は見いだせないのが、現時点までの本学部学生の状況である。

もっとも、これらの結論は第３期生以降の新入生調査によって変更を迫られる可能性がある。また、特に地域協働マネジメント力関連項目に関しては、入学後の自己評価がどう変化したかを測定することも重要であろう。これらの論点については今後の課題としたい。